

## 第三章 産業

### 1. 近代産業の胎動

明治政府は、「殖産興業」「富国強兵」を合い言葉に産業面では、兵器製造・造船とこれに関連する軍事産業を中心とした官営工場・鉱山を建設した。また、主要な輸出品である生糸など繊維工業の育成にも力を入れた。

明治10年に始まった西南戦争が終わった後、明治政府は、財政の負担から軍事関係をのぞいた官営工場・鉱山や工場の機材を民間に払い下げた。繊維工業においてもイギリスより購入した紡績機械を有利な条件で民間に払い下げた。明治15年に、その払い下げを受けた伊藤伝七は、水力を動力とするため、川島村の矢合川と三滝川が合流する近くの地点に三重紡績所（後の東洋紡績）を建設した。

当地区の産業は、農村地帯として農産物を生産する第一次産業を中心であるが、これに関連した産業として繭から生糸を紡ぐ製糸工場が明治中期から大正にかけて小規模ながら数工場作られている。また、農家では養蚕・藁細工作り・牛の飼育が明治から大正・昭和の中期にかけて盛んに行われた。養蚕は、春蚕・夏蚕・晩秋蚕と年3回で約半年の間、家の中に蚕の棚が組まれており朝早くから桑摘み作業に従事した。これらの関連産業は、昭和初期の恐慌や昭和30年代の高度成長による生活の変化・農業の機械化などにより、ほとんどその姿を消している。今では、神前郷土資料館にその面影を留めるのみである。

次に、神前村の産業として製糸・味噌醤油醸造・瓦製造・藁細工・酪農等の内容について記載する。

### 2. 製糸工業

#### 「西林製糸」

明治24年6月に、神前村大字西野で西林製糸が西林喜三郎により設立された。職工数男1名、女10名で神前地区での製糸の草分であるが、大正時代に廃業している。

#### 「川村製糸」

明治30年頃、神前村大字高角で川村製糸が川村伝三郎により設立され、伝一郎・芳雄と引継がれるが昭和7年の不



養蚕風景

況により倒産した。その後、川村保三が昭和製糸と改称して再建するが、昭和19年戦争激化により工場を閉鎖し坂部製糸へ働きに出る。戦後、昭和22年に昭和製糸を再開し昭和32年まで続けられたが、女工6名と小規模なため製糸業をあきらめ燃料店に切替え、現在も川村燃料店として続いている。

川村製糸の大正3年の操業状況は、職員男1人、女39人、計40人、1日の就業時間13時間、年間就業日数275日、原動力蒸気1基3.5馬力で、年間の製造高600貫、価格33,400円であった。

### 「山口製糸」

大正の初めに、神前村大字高角で山口喜代松により山口製糸が設立され一郎に引継がれるが、昭和7年の不況により倒産する。その後、一郎の弟日比喜一と山口喜代夫、矢田久郎、田中哲次郎の4人により合資会社日の丸製糸を立ち上げるが、戦争激化により昭和18年に坂部製糸に強制合併され軍需物資として縄・真綿を製造した。昭和19年12月7日の東南海地震により工場の約半分が倒壊する。戦後、日比喜一によりナイロン靴下の再製を昭和35年まで続けた。

### 「岡山製糸」

大正の初めに、神前村大字高角で岡山仙松により岡山製糸が設立されたが、昭和7年の不況により廃業し、現在は敷地のみが残る。

## 3. 味噌・醤油醸造業

### 「小林味噌・醤油」

明治10年代、寺方村で、小林半弥により醤油の製造が始められたが、昭和7年頃閉鎖された。

### 「伊藤醤油」

明治22年1月12日、伊藤良吉により寺方村に製造所「伊藤醤油」が設立される。昭和7年の不況により片倉醤油に買取られ、昭和11年に倒産する。

昭和21年に、その跡地に澱粉工場が矢田久吉により設立されるが、昭和40年頃に閉鎖される。現在、空地として矢田一郎氏と伊勢不動産が所有している。

### 「ヤマニ醸造」

大正7年に屋号「山ニ」として、神前村大字高角に中村藤次郎が設立し、「味噌・醤油」を製造販売した。

昭和27年に、社名を「中村醸造株式会社」と改正し、同28年に、工場事務所を現在の所に移設した。さらに、平成8年に、社名を現在の「ヤマニ醸造有限会社」と改正した。

現在は、四代目中村健郎氏が経営しており、原料に無農薬栽培の北海道産大豆などを使用し、無農薬・無添加の味噌・醤油を製造販売している。

### 「岡本醤油部」

大正10年に屋号「かねぎ」として、神前村大字高角に岡本奎平が設立し、「味噌・醤油」を製造販売した。

現在社名は、「有限会社 岡本醤油部」（昭和32年登録）で二代目岡本政一氏が経営しており、「たまり醤油」を製造販売している。

### 「山口味噌・醤油」

神前村大字曾井で、山口寺代松が醤油製造を始めたとあるが、現在のどこで操業していたのか不明である。

## 4. 瓦製造業

明治初期、尾平村字永井にて川北清三郎により、瓦製造所が設立され瓦の製造販売が始まる。職人男5人、女2人で桑名地内に支店を置き県内に販売していたが、昭和22年12月に県外の大規模店に押されて廃業する。

曾井山は、日本瓦の製造に欠かせない、青岩の土が豊富にあるところで知られている。曾井村での瓦製造の歴史は古く、明治の始めに創業したと言われる。原料となる土の良質なことと製造職人の技術が評価され「曾井のカワラ」として、川村、山田、小柴、の3ヶ所あった製瓦所は、高く評価され産地化が進められていた。しかし、終戦後しばらく続けられた製造も、技術者の高齢化と後継者不足から平成8年に製造業としては休止状態となる。現在では、県外から仕入れての販売だけが続けられている。

## 5. <sup>わら</sup>藁細工

明治から昭和の中頃にかけて、ほとんどの農家では農閑期の副業あるいは夜なべ仕事（夜



すづみ



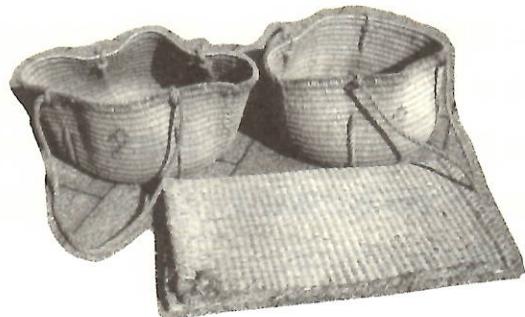
むしろ打ち

の仕事)として「ふご」「むしろ」「ぞうり」「たわら」「なわ」などの藁細工作りが盛んに行われた。材料の藁は、冬場取入れの終わった田で「すづみ」(藁を山形に積んだもの)とし、夏場は、家の「つし」などに保管しており、年間を通じて仕事が出来た。藁は、水車小屋などで打って柔らかくして使用した。

藁製品のうち、高角とその周辺で作られた「ふご」は、「高角ふご」として有名であった。仕事が丁寧で長持ちするため、近郷の農家から注文が入り飛ぶように売れたそうである。また、遠くでは木曽三川などの米所まで自転車に「ふご」を高々と積んで売り歩いた。しかし、昭和30年代後半から40年代にかけての、農作業の機械化により需要が無くなり作られなくなった。

「ふご」の元になる「うちおとし」(藁織物)は、最初「ハタゴ」「ヒ」「イサシ」の道具を使って二人一組で織っていた

が、昭和初期に機械ハタゴが導入され一人で仕事ができるようになった。ただ機械といつ



ふごとむしろ



みのとかさ

ても原始的なもので動力は織る人の手足だけである。

また、神前地区では、藁草履作りも盛んで農繁期、農閑期を問わず作られており、大事な現金収入のもとであった。藁草履を作るのは、主として女性で子供も学校から帰ると藁打ちが待っていた。土間に藁打ち石が据えてあり、横槌で藁を打った。鼻緒はなじをたてる前までの工程を緒前（おーまえ）と云い、少し大きくなつた子供は緒前まで作った。ふご作りでも縄ないや、「うちおとし」を天火に干して磨く仕事など子供がよく手伝つた。

こうして作った藁草履は、四日市市の旧市街あたりまで売りに行った。また、大掃除の時期になると多く売れたと言う。

農家にとって藁はすぐれもので、先に上げた藁製品はほとんどが農作業に使用するものであり、穀物の取入れから出荷までの容器、敷物、包装材などに藁製品が使用されており、また、煮炊きの燃料にもなり、古くなると田畠の肥料となり、昔の農家は天然資源を利用した実に地球にやさしい生活をしていたものである。

## 6. 神前酪農

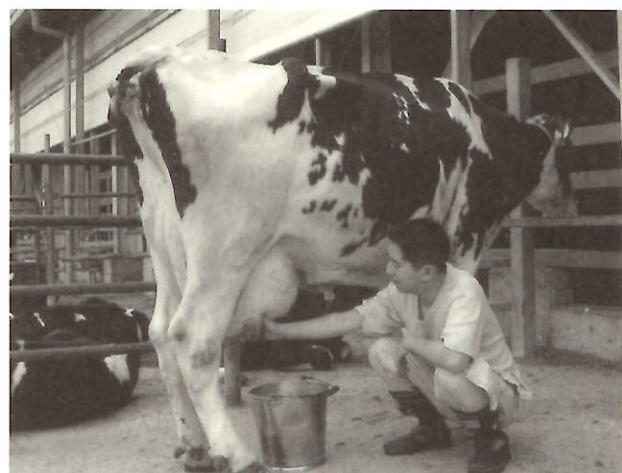
高角村には、明治20年頃早くも搾乳業者が存在しており、また次第にその周辺地域で搾乳業者に従うかたちで乳牛飼育を行う農家が増えてきたものと考えられる。

乳牛飼育の立地として、畑があり、三滝川の伏流水が涌き出て真夏でも17°C以下の清水が各戸に引き流されていることがあげられ、かかる当地で酪農業の有利性を説き、乳牛飼養管理の指導を行った加藤清造（当時三重郡畜産組合評議員、四日市家畜市場嘱託）の熱心な活動の成果もあって、大正12年1月組合員18名を以って臨時創立総会を開催し、有限責任神前畜牛販売購買利用組合を高角公会所の西約50mの所にある伊奈利神社の跡地に設立した。

以後、同年5月搾乳舎落成、大正13年1月第1回通常総会を開催、組合員29名、初代組合長に加藤清一郎が就任した。

昭和2年 組合長 山口竹之助 組合員 53名

昭和9年1月 保証責任神前畜牛販売購買利用組合に名称変更。



搾乳風景

昭和13年 組合長 青木長蔵 組合員 68名

昭和22年度総会より、神前酪農組合に名称変更している。

昭和26年に、三重郡四日市酪農協同組合が設立され、神前酪農はその下部組織組合として参入する。昭和28年神前酪農組合に共同集乳所を設置する。

昭和30年、町村合併により三重郡四日市酪農は、四日市酪農業協同組合と名称変更。

昭和40年、高角、寺方、朝上地区の一部組合員が四日市酪農を脱退して、昭和42年4月に北三重酪農業協同組合を神前酪農組合の建物内に設立する。組合員115名。



神前酪農の鬼瓦

その後、高度成長の進展、従事者の高齢化等により順次組合員が減少し、ついに平成11年に事務所、集乳所等の建物を解体撤去し、大正時代から続いてきた神前酪農組合は終焉を迎えた。

跡地には、昭和3年に建立された、昭和天皇の御大典記念の門柱がある。

## 7. 神前村農会

明治32年に、農会法が布告され、これに基き農業の改良発達向上を目的とし、国家事業の系統的組織として、国、県、郡、町村の各レベルに農会が設置された。

三重郡においても、明治39年3月に、三重郡長を会長とし数名の農業技手を置き、郡内29町村の農会を統括する組織として、三重郡農会が設置された。神前村にも神前村農会がおかれた。

農業の改良発展を図るため、農会が行う事業は次のような事柄である。

- ① 農業に関する講習、講話、品評会および種苗交換会の開設
- ② 農業に関する試作場、模範場の設置
- ③ 肥料、種苗、蚕種、農具、家畜の共同購入および農産物の共同販売
- ④ 利水・排水および耕地の整理
- ⑤ 肥料、農具の改良および農產品、家畜、家禽の改良繁殖 など

## 8. 大正時代の神前村の農産物収穫高 (米麦大正3年 秋蚕大正4年 春蚕大正5年)

米 作付面積 323町	収穫高 7,854石 (1,414kℓ)	収穫価格 99,326円
麦 作付面積 91.4町	収穫高 990石 (178kℓ)	収穫価格 5,646円
春蚕 養蚕戸数 240戸	取繭量 503石 (91kℓ)	価格 24,725円
秋蚕 養蚕戸数 193戸	取繭量 185石 (33kℓ)	価格 6,305円
(参考) 平成16年	米 作付面積 140町	転作面積 74町
	麦 作付面積 21町	

## 9. 神前農協 (三重四日市農業協同組合 神前支店 尾平支店)

農業団体の組織として、明治45年1月、神前村大字尾平に尾平信用購買組合（初代組合長 生川宗三郎、組合員29名）が設立された。引き続いて同年4月、神前村大字高角地内に神前信用販売購買組合（初代組合長 村山栄次郎）が設立された。

昭和15年7月、神前信用販売購買組合は、尾平信用購買組合を併合して神前産業組合（初代組合長 川村貢）と改名する。その後、当組合は神前農業会（初代組合長生川為一郎）となる。

終戦後、GHQは、農地改革で解放された農民が再び小作人に転落しないための改革として、農業協同組合の設立を遂行した。その基本的目的は、「農地改革と同様に、農民を政府や非農業的利害の支配から解放し、農民の独立を確保し、その社会的経済的地位を改善する。」ことにあった。昭和20年12月のGHQの指令により、昭和22年に農業協同組合法と農業団体整理法が公布、施行され、これによって神前村でも昭和23年12月に、戦時中から続いた神前農業会を解散し、神前農業協同組合（初代組合長 青木長蔵）が設立された。設立当時、インフレの激化により国民生活はいやが上にも窮屈し、農地は戦時中からの肥料不足で収穫が少なく、生産責任割当ての供出を完納すると保有米が不足すると訴える者が続出した。農協の事業としては、主として供出物資の操作を行うのみで、本年度白米供出約二千俵余である。しかし、村民は農協の重要性を理解し、住民の90%以上が農協に加入した。



JA三重四日市神前支店



J A 三重四日市尾平支店

昭和27年4月に、菰野厚生病院の分室を誘致し、組合員の好評を得ている。

昭和41年4月に四日市市内の20農協が大同合併し、四日市市農業協同組合が創立され、神前農協は、四日市市農業協同組合神前支所、尾平出張所となる。さらに、平成3年4月の菰野町農協始め三重郡4農協との合併により、現組合名の三重四日市農業協同組合神

前支店、尾平支店となった。農協の組織・事業は増大し大規模農協となった。